

詩の逆説的解釈 ——“You’re”の分析——

柏 原 有 紀 子

1. はじめに

Ariel はアメリカの女流詩人、シルビア・プラス（1932-1963）が最後に編んだ詩集である。そこに収められている作品で、最も初期の詩が“*You’re*”（1960）である。1961年3月18日に“*Tulips*”を書くまで、彼女はシソーラスを丹念に引きながら一語一語を吟味して詩を創作していた。“*Tulips*”以降、プラスはシソーラスを引かずに驚異的な早さで次々と詩を生み出していった。*Ariel* の大部分がこの豊かな創作期の作品である。プラスの夫で彼女の死後にイギリス桂冠詩人となったテッド・ヒューズは、彼女の創作法の変化を以下のように表現している。

彼女は自分の本当の声のようなものを聴いた、そして今や彼女自身の新たなやり方を得た。**TULIPS** と呼ばれる詩はそのようなやり方の最初の兆しであった。彼女はこの詩をいつものようにシソーラスをじっくりと調べることなく書き上げた、それも素晴らしい早さで、まるで急ぎの手紙でも書くように。この時から、すべての彼女の詩はこのようにして書かれた¹⁾。

上述の創作法の変化は、言葉の加工と関わりがあると考えられる。“*Tulips*”以降の作品がプラスの内面をストレートに表現しているのに対して、それ以前の作品ではシソーラスで語の選定を行うことで内面の表現が別の形へと変えられていったと思われる。このような言葉の加工は精神分析における夢の歪曲と通じるものがある。

フロイトは『夢判断』*Die Traumdeutung* の中で無意識的願望の表れである夢は、検閲によって夢見手の意識に受容されうる形へと歪められると述べている。また、フロイトはシラーの手紙を引用して、夢と詩の創造過程の類似性と、その過程で「批判」と呼ばれる意識の妨害が働くことを指摘している。

「欲せられざる考え」は、それが浮かび上がろうとするのを阻止するすさまじい抵抗に会うのがつねである。しかしもしシラーの言葉を信用していいのなら、詩人の創作もまたやはりそういう心的態度を条件としているらしい。……シラーはケルナーが自己の創作の才の乏しいのを嘆くのに対してこう答えている。「君の嘆きの原因はどうやら、君の悟性が君の想像力に対して加えている強制にあるようだ。僕はここでひとつの考えを述べよう。それをひとつの比喩で説明してみよう。悟性が流れ込んでくる諸観念をいわば入口のところですでにあまりに厳格に吟味することはいいことではないし、魂の創作行為にとって不利益なことであるらしいのだ。」²⁾

上で述べられている「欲せられざる考え」に加えられる抵抗がプラスの“*Tulips*”以前の創作過程

でも働いていたことが考えられる。そのためプラスはストレートに言葉を発することができずにソーラスによって時間をかけて自らの内面を変形させて表現していたと思われる。

Ariel に見られるプラスの後期の作品群が告白詩と評されるほど力強く自らを語り出すのに対し、それ以前の作品は難解と評される傾向がある。それはおそらくプラスが言葉に多くの加工を施したため、彼女の内面から湧き上がったものが読み手にはわかりづらくなっているためと考える。語の加工によって彼女の真意や内面が歪められて表現されたと考えるならば、書かれた詩を読むと同時に、そこから消そうと試みられた内容にも目を向けていかななくてはならないであろう。

以上のような問題意識から本稿では“*You're*”を取り上げ分析する。

2. 詩の全体像と分析の視点

You're

あなたは

Clownlike, happiest on your hands,
Feet to the stars, and moon-skulled,
Gilled like a fish. A common-sense
Thumbs-down on the dodo's mood.
Wrapped up in yourself like a spool,
Trawling your dark as owls do.
Mute as a turnip from the Fourth
Of July to All Fool's Day,
O high-riser, my little loaf.

ピエロみたい、一等しあわせ 逆立ちして
足を星に向け、月の頭、
魚のように 網にかかり あたりまえのこと
ドードーのやり方に、親指下ろし
糸巻きみたいに 自分をつつみ、
梟のようにあなたの闇をトロールする
蕪のようにおしだまり 七月
四日から 万愚祭まで
ああ 高く昇る者、わたしの小さなパン。

Vague as fog and looked for like mail.
Farther off than Australia.
Bent-backed Atlas our traveled prawn.

霧のようにぼんやりで 手紙のように求められる
オーストラリアよりも遙か遠く
背の曲がったアトラス

私たちの旅してきたくるまえび。

Snug as a bud and at home
Like a sprat in a pickle jug.
A creel of eels, all ripples.
Jumpy as a Mexican bean.
Right, like a well-done sum.
A clean slate, with your own face on.³⁾

蕾のようにひっそりと くつろいで
ピクルス瓶の小魚みたい
うなぎのびく、みな小波をたてる
メキシコ豆みたいによく跳ねる
そう、まるでよくできた総和のように
真白の石版、あなたの顔を向けて。

詩は“*You're*”「あなたは」というタイトルを主語にして述語が作中で次々に綴られていく形式をとっている。“*You're*”をプラスが直接語り得なかった内面も含めて読み解こうとする際、心理療法における不在の視点は示唆に富む。山本は不在の視点についてこのように語っている。

「象徴 (symbol: σύμβολο)」の語源は、ギリシャ語の「札、割り符」に相当するという。そもそも二つで一つのものが一方を欠くことによって、そこに不在である他方の存在を明示することがその語源とされる。少なくとも、筆者は子供時代の生活習慣から、お地蔵様や仏像に対して、そこにある像が神や仏として会釈、合掌していた。しかし、沖縄研究から理解できたことは、まさに、そこに在る像はそこに不在の神や仏を表していたと理解できるようになったのである。まさに御嶽の聖石（イビ・ビジュル）のように、そこが神との交差点であることを示しつつもそこに神は不在であることを同時に示しているのである。琉球的な言い方をすると、その石はニライ・カナイへの入り口を閉ざし、塞いでるものでもある⁴⁾。

現れている存在が、現れていない存在を表すと考えれば、“You’re” からプラスが描かなかった彼女の内面を考察することが可能となるであろう。これを割り符の例で考えてみるならば、今、我々の手元にある札、「在」が“You’re”であり、我々の手元にはないもう一方の札、「不在」は“I’m”であると考えることができる。

“You’re”についての描写が繰り返し語られるこの詩において、“You’re”を読みながらも、“I’m”に目を向けながら分析を進めて行きたい。

3. 詩の背景

“You’re”は1960年1月、2月に書かれ、詩は胎児が母親のお腹の中で眠りながら誕生を待つ様子が描かれている。この時期プラスは妊娠しており、この作品はプラスがお腹の子（第一子、フリーダ）を歌ったものと見られている。当時のプラスとこの作品についてスティーブンソンはプラスの伝記でこのように語っている。

シルヴィアは妊娠のために身体は重かったが幸せなエネルギーに満ちていた。……妊娠の月がずっと進んでからも、シルヴィアが手をひざに置いて静かにすわり、ただ休息する姿は一度も見られなかった。

三ヶ月の間、シルヴィアはほとんど一編の詩も書かなかった。妊娠をテーマにした気楽な詩「おまえは」をのぞけば……まともな書き物といえば日誌や家への手紙くらいであった⁵⁾。

プラスは1960年4月1日にフリーダを出産している。また、この年の出来事として特記すべきは、彼女の処女詩集、*The Colossus* が出版されたことである。1960年1月に、ハイネマン社が*The Colossus* を出版したいと言っていることがプラスに告げられた⁶⁾。そして、2月11日、ロンドンで正式に契約が交わされている⁷⁾。

これらの背景を念頭に、まずこの詩に書かれている情景を見ていき、その後に節を改めて不在の内容、つまり“I’m”に関して考察していくことにする。

4. 詩の情景

You're

あなたは

Clownlike, happiest on your hands,
Feet to the stars, and moon-skulled, ⁸⁾

ピエロみたい、一等しあわせ 逆立ちして
足を星に向け、月の頭、

詩は頭を下にして逆立ちした人の様子で始まっている。詩全体の静かで、優しい語り口と、詩の二連目で小さな生命が小波のように動く様子から逆立ちした人は胎児であることが推察される。

Gilled like a fish. A common-sense
Thumbs-down on the dodo's mood.
Wrapped up in yourself like a spool, ⁹⁾

魚のように 網にかかり あたりまえのこと
ドードーのやり方に、親指下ろし
糸巻きみたいに 自分をつつみ、

「魚のように 網にかかり」「糸巻きみたいに 自分をつつむ」のは子どもが羊膜の中にいる状態と考えられる。羊膜の中は羊水に満たされており、水の中の子は「魚」にたとえられる。空気中でしか生きられない人間が、水中で生き、頭を天に向けて直立歩行する人間が頭を下にしている。このように胎児は常識を無視するような存在であることがほのめかされる。そのような常識は胎児にとってはドードーがはるか昔に絶滅したことのように関わりのない取るに足りないものである。それ故、つまらないこの世の常識に胎児は親指を下に下げる否定のジェスチャーを示す。このジェスチャーは頭を下に向けて眠る胎児の親指が自然に下に向いている様子と重ねられている。

Trawling your dark as owls do.
Mute as a turnip from the Fourth
Of July to All Fool's Day, ¹⁰⁾

梟のようにあなたの闇をトロールする
蕪のようにおしだまり 七月
四日から 万愚祭まで

目が開いていない胎児は、夜行性の梟のように暗闇の中で生きている。梟は空を飛ぶ鳥であるが、そのような鳥もまた大地にいる生き物を捕らえて生きている。ここでは、子が大地、つまり母胎から栄養を受けて生きている様子が描かれている。そして、鳥であるのに飛べないドードーと同様に飛ぶことができる梟もまた、大地がなくては生きていけないことが語られている。

7月4日から次の年の4月1日までの間は、胎児が母親の胎内にいる期間を表す。約10ヶ月の間、子供は産声をあげる誕生まで、母の胎内という地中で蕪のように静かに育っていく。万愚祭（エイプリルフール）が記されているのは、胎児が転地逆転のこの世の摂理を無視した存在であるということも暗に示しているであろう。万愚祭こそ“clownlike”「道化のような」胎児が“clown”「道化」として誕生するにふさわしい日でもある。また、4月は春の訪れを表し、生命が萌え出る季節であることも意味する。そして、4月の始めが出産予定日であることがプラスに前もって知らされていたとも考えられる。

O high-riser, my little loaf. ¹¹⁾

ああ 高く昇る者、わたしの小さなパン。

“All Fool’s Day”「万愚祭」という言葉で誕生の日を迎えた子は、母胎から出て初めて外界の光を目にする。暗闇から出て初めて光を見る様子は、夜から昼が現れる日の出の情景として描かれる。“high-riser”は昇る太陽であり、赤子が初めて目にする外界の光である。“high-riser”「高く昇るもの」は赤子にとっては彼を取り巻く世界の変化を語るが、母にとっては希望の光が生まれたことを意味する。「高く昇る者」はこの世の光、イエス・キリストを表している。生まれた子供をキリストに見立てることは後述するプラスの他の作品にも見られる。この詩においては、後に続く“my little loaf”が子どもとキリストを重ね合わせていることを裏付ける。高く昇る太陽の円形とパンの円形が重なり合っている。パンはキリストの身体であり、聖体である。

ここでは、10ヶ月の間、母胎で眠りこの世の理とは関りなく育ってきた子どもが、誕生した瞬間、彼女の手を離れて遠くに行ってしまうかのように描かれている。大地なくしては生きていけなかったドーデー、梟、燕が大地を離れた太陽となり天へと昇っていく。パンもまた大地から栄養を受けて育った麦が大地を離れ刈り取られ加工された食べ物であると言える。

Vague as fog and looked for like mail.

霧のようにぼんやりで 手紙のように求められる

Farther off than Australia.

オーストラリアよりも遥か遠く

Bent-backed Atlas our traveled prawn.¹²⁾

背の曲がったアトラス

私たちの旅してきたくるまえび。

天に昇った子はプラスの手の届かぬものになる。霧のように漂い、捕らえることができない子を彼女は手紙のように捜し求める。子は、オーストラリアよりも遥か遠く、この世の果てで天を支えるアトラスがいる場所まで捜し求められる。子がキリストに例えられたのと同様に、アトラスも子どもの姿といえるだろう。キリストが十字架を担ったように、アトラスもまた、この世を担っている。二人の像は、この世で生きるには重荷を負わなくてはならず、子どもが“clownlike”「道化のよう」ではいられないことを告げる。

天を支えるアトラスの背が重荷で曲がっているように、海を長い間旅してきた車えびの背も、旅の疲れや苦勞で曲がっている。背が曲がったアトラスは水の中の車えびの姿となり、それは羊水の中で眠る胎児の姿と重なる。今、ここにいないと思い捜し求められていた子は、海老のように広い海を渡り、いつの間にか母の胎内という海で休んでいた。

子を天高く昇る太陽、キリストにたとえ、そしてその後で子を地の果てまでも捜し求める表現から、プラスにとって子どもは、長い間待ち望んでいた存在であることがわかる。そして、プラスがこれまで子どもを切望していながらもなかなか子どもを授かることができなかったのではないかと推測することができる。子どもができたと思っても、そうではなく、強く子どもを望みながらもそれが叶えられなかった失望や、身体感覚として妊娠しないように感じていた可能性がある。そして、プラスにとって妊娠が縁遠いものであったという風にも考えられる。つまり、プラスにとっては子どもは天に昇る太陽のように、「手の届かない」「恐れ」であったとさえいえる。当時のプラスを描写する伝記はこのように語っている。

6月にボストンのアパートを去る前に、シルヴィアはようやく達成した精神的平静を脅かす挫折にもう一度みまわれた。この一年、妊娠していないのにしているかと思って驚くことがしょつ

ちゅうだったので病院へ行ってみたところ、彼女は一時的に生殖不能だと言われたのである。何もかもが突然「不毛」になってしまった。彼女は「この世の燃えがらの一部、そこから何も生えず、咲かず、実を結ばぬもの」なのだった。過剰な反応や、涙や絶望と闘いながら検査に行くと、排卵が弱いということが発見された¹³⁾。

彼女にとって、妊娠が遠いものであり、子どもを授からないことに失望していたことがわかる。

Snug as a bud and at home	蕾のようにひっそりと くつろいで
Like a sprat in a pickle jug.	ピクルス瓶の小魚みたい
A creel of eels, all ripples.	うなぎのびく、みな小波をたてる
Jumpy as a Mexican bean. ¹⁴⁾	メキシコ豆みたいによく跳ねる

けれども子どもはいつの間にかプラスの胎内に宿り、外からは見えないが確かに育っていた。子どもは蕾の中で密やかに眠り、ピクルス瓶の中の小魚のように泳ぎ、魚籠の中のうなぎのように動いている。そして時にメキシコ豆のように跳ねて、胎動を伝える。ここではようやく授かった子は、蕾、瓶、魚籠のように外からは見えないのだが、その中では静かに息づいており小波のように動いていることを言っている。

Right, like a well-done sum.	そう、まるでよくできた総和のように
A clean slate, with your own face on. ¹⁵⁾	真白の石版、あなたの顔を向けて。

外側からは目に見えない、いつ宿ったのかもわからない待望の生命は、これまでの母の待ち焦がれていた気持ちを十分に購うかのように胎内で確かに育っていく。その子はまだ何も書かれていない石板のように汚れを知らず、そして何事も未来において描いていける可能性を持っている。

5. “I’m” に関する考察

5-1. “You’re” と “I’m” の重なり合い

この作品に “I’m” は直接書かれてはおらず、“I’m” という表現もない。この詩は “I’m” について何も語っておらず、そのためこの詩に “I’m” はないということもできる。この詩の中で “You’re” は切実に捜し求められている。「霧のようにとらえどころのない」存在を「手紙のように」捜し求める姿がある。そして外界を地の果てまで捜し求めていた存在は外の世界ではなく、外からは目に見えない内なる世界、母の胎内で誕生のときを静かに待っていた。

外からは見えず、一見存在しない胎児 “You’re” と “I’m” の存在は重なり合う。“I’m” は詩の中には描かれておらず、一見存在しないからである。このように考えれば、“I’m” は “You’re” という胎児と同様に、目に見えない内なる場所に隠されており、そこにおいて確かに生きて、存在していると言うことができる。

更に述べれば、この詩は “You’re” という胎児が、外からは中が見えない固い器の中に隠れてい

ることを表現しているが、その奥には“I’m”という胎児が、外からは見えない“You’re”という器の中に隠されている。

“I’m”が「隠されている」と考えると詩のナンセンスな言葉の数々は、核心的な“I’m”について「語るまい」とする努力であり、真にプラスにとって重要な“I’m”という中心的主題を守るためにあえてその周囲に一見くだらない言葉がばら撒かれたと考えることができる。詩ではプラスは“You’re”については多く語っているが、自らについては頑なに沈黙している。自らの内面の核心部分を“You’re”というナンセンスな言葉で覆い、殻を作っている。そして内面に誰も踏み込ませまいとしている。しかしそうでありながらも逆説的に“You’re”によって、彼女は“I’m”を語っているといえる。“I’m”を覆い隠す固い殻は、彼女が詩のなかで繰り返し語る胎児を隠す入れ物、蕾であり、ピクルス瓶であり、うなぎの魚籠、そしてメキシコ豆の外皮である。隠すことで彼女は自らの存在を表している。

5-2. 胎児に関する考察

この詩は一見、胎児を歌ったかのような描写が綴られており、“You’re”は胎児を指すと考えることもできる。けれども前節で述べたように“I’m”もまた胎児のような状態にあるのだと考えるならば、この詩に書かれている胎児の状態にあるものを単なる現実の胎児としてのみ捉えることは、詩の解釈として十分とはいえないであろう。むしろ、彼女の内面で「胎児」として表現された心的な動きがあったと考えたほうがこの詩の持つ奥行きを見ることができるのではないかと考える。

プラスが「胎児」として表した内的な動きを考える際、ユングの象徴の概念は示唆を与えてくれる。河合は象徴と記号の違いを明らかにしながらユングの概念をこのように述べる。

ユングは象徴を記号または標識とかたく区別して考えた。彼によれば、一つの表現がある既知のものを代用し、あるいは略称している場合、それは象徴としてではなく、記号である。これに対して象徴はたんなる既知のものの代用などではなく、ある比較的未知なものを表現しようとして生じた最良のもの、その他にはこれ以上適切な表現法が考えられないという場合である¹⁶⁾。

この詩について考えると、“You’re”を現実の胎児として捉えるのは記号であり、言葉の置き換えである。そして“You’re”という言葉でしか表現できなかったプラスの内面の動きを殺してしまうことになる。けれども、“You’re”が胎児のような表現でしか語りえない何かを「表現しようとして生じた最良のもの」であると考えれば、この詩に奥行きを見出すことができる。この奥行きの中で“You’re”を見ることで、はじめてこの詩の多元的な意味を見出すことが可能となってくる。

河合は人が象徴を形成するのは心的内部に対立する傾向がある時だと述べる。

象徴が生じる前は、相反する二つの傾向が意識され、その完全な対立を、簡単にどちらかに加担することなく経験することが認められる。この場合、どちらかを抑圧すると簡単であるが、自我はそのような簡単な解決をせず、この場合、この両者の対立により自我は一方的に行動することができなくなり、一種の停止状態を味わうこととなる。ここで今まで自我機能を働かすのに役立っていた心的エネルギーは、自我から無意識内へと退行を起こす。つまり、心的エネル

ギーはその源泉へと帰り無意識の活動が始まる。……このような強い退行現象が起こり、自我はその機能を弱めながらも、それに耐えて働いているとき、無意識内の傾向と自我の働きと、定立と反定立を超えて統合された心像が現れてくることがある。このように統合性が高く今までの対立を超えて創造的な内容を持つものが象徴であり、このような象徴を通して今まで無意識へと対抗していた心的エネルギーは進行（progression）を開始し、自我は新たなエネルギーを得て再び活動する¹⁷⁾。

心的内部に対立を抱えるとき、自我機能が弱まり、退行によって人は外からは創造的、活動的には見えないことが多いと彼は述べる。けれども、そのような葛藤に耐えてあるとき対立する傾向を統合する象徴が現れ、「心的エネルギーは建設的な方向に向かう。」¹⁸⁾ 対立する傾向を抱く以前と、対立を統合し新たな象徴が現れた後では内的な意味で人はもはや同じではないといえるだろう。そのため、「象徴形成の過程は創造の過程である」¹⁹⁾ ということができる。

ユング心理学の象徴の概念は、“You’re”の胎児を理解する手がかりを与えてくれる。けれども、ここで胎児はプラスの新たな自己の象徴であると述べるのは早計である。これではプラスの胎児のイメージを記号にして「新たな自己」と言い換えただけとなってしまう。ユング心理学からの示唆を受けて、ここで述べたいのは、胎児はプラスの当時の内的状態を以下のように描写しているのではないかということである。プラスの内的な生命は胎児や種のように外からは殻や土に覆われて見えない。そのため、一見、不毛にも見える。けれども、それは彼女の奥深くで眠り、静かに誕生のときを待っている。隠れながらも、それは自らが確かにここに存在しているのだという胎動を伝えている。プラスがこの作品を書いたとき、彼女の精神内部ではこのような動きがあったと考えられる。

これまでの詩の分析から“ You’re”はプラスの内面を描き、それが胎児のように誕生を待っている眠りの状態にあることが見出された。しかし、これは母がお腹の子に語りかけている詩という解釈を否定するものではない。また、一読しただけでは胎児の詩のように読めることを筆者は否定しない。むしろ、それは胎児がプラスの心的な状態を表す最もふさわしい像であり、胎児のイメージと彼女の心的状態が緊密に重ね合わさったために、彼女は胎児を歌うことで自らを歌いえたのだと解釈する。胎児は彼女の心的な状態の表現が高度に結晶化された像であるということもできる。彼女の心的状態が胎児のイメージへと極めて高い完成度で結晶化されたため、この詩は胎児を歌う詩のような姿になったと考えられる。

5-3. 不毛に関する考察

一見すると自らを語り出さない詩として“ You’re”を見るのは外側からこの詩を見た解釈である。前節までは、見えない場所に“ I’m”は隠れて存在する」という地中からの視点で“ I’m”について論じてきた。本節では地上からの視点、つまり外側から見ると“ I’m”はない」という視点を前節までの議論に加えて考察していきたい。

“ You’re”を外側から眺めると、地中に胎児が眠る、外からは何も生命が見えない、言わば冬の時である。生命の種は地中に埋められていても、種はまだ地上に芽を出していない。大地は一見、不

毛である。プラスは自らが排卵が弱く生殖不能であるとわかったとき、自らを「不毛」と語っている。

この詩に描かれる地中の蕪の静けさは、荒涼とした大地の冷たさを思わせる。また、生命を入れるべき器である蕾、ピクルス瓶、魚籠はみな冷たく固い。その中に入っている生命、華の芽、小魚、うなぎは温かい血を持たない冷たい生き物である。プラスの他の詩からも、彼女の不毛の感覚をうかがうことができる。“You’re”の約2年後に書かれた“Nick and the Candlestick”という詩の中で、プラスは大地をこのように描いている。

The earthen womb

大地の母胎

Exudes from its dead boredom.²⁰⁾

死ぬほどの退屈から滲み出す。

この作品は、鍾乳洞が水で少しずつ溶かされ、石柱を形成していく過程を描いている。鍾乳洞の中で、天井から地面に向かって伸びるつらら（鍾乳石）と、地面から天井へ向かって伸びるつらら（石筍）が、長い時間をかけて一つに繋がり石柱が形成される。天からのつららと地からのつららが一つになるというイメージから、石柱は天と地を繋ぐ、イエス・キリストの誕生と重ね合わせて描き出されている。

上で引用した詩の場面では、一滴の水が長い時間をかけて地表から土の隙間を通り、地価の鍾乳洞まで染み出す様子が描かれている。水が洞窟に届くまでの時間が長く、また、届いたとしても僅か一滴であることから、鍾乳洞の中では「死ぬほどの 退屈」というほど変化を感じられないことが語られている。

生命を生み出す大地をこれほど変化の乏しいものとして描く様子から、プラスは自らが女性として何も生み出すことができないような、不毛の感覚を抱いていたことが読み取れる。それでも鍾乳洞の中にはよく見れば、イモリや蝙蝠がいるという描写が続き、小さな生命の兆しのあとで詩は次第に生命力を増していき、キリストの誕生の場面で結ばれる。一方、“You’re”では、子どもの誕生まで語られておらず、“Nick and the Candlestick”の冒頭に見られるような不毛の感覚と、不毛であるかのような場所にわずかな生命の兆しがあるということが語られている。

地中に眠る蕪のように、母の胎内の子どものように、“You’re”は“I’m”を隠している。“I’m”が地中に、母胎内にあるのであれば、“Nick and the Candlestick”の地中の鍾乳洞は“You’re”における隠された“I’m”であるといえる。なぜなら、大地の中の鍾乳洞の中で、石柱、イエス・キリストという子が育まれていき、鍾乳洞は母胎であるといえるからである。それ故、“Nick and the Candlestick”の冒頭“I am a miner”「私は鉱夫。」という言葉と“You’re”の詩がつながることになる。“a miner”「鉱夫」は詩の文脈で読めば、地中を水によって掘り進む鍾乳洞となる。鍾乳洞は胎児を包む母胎として描かれており鍾乳洞内に淡い光が満ちる様子は、母胎内でまだ目が開かない子どもが感じている光と考えていいであろう。

“You’re”によって語られていない“I’m”は鍾乳洞のように生命を育む場所である。つまり、“You’re”において彼女が“You’re”を語るとき、“I’m”は語られる必要はない。なぜなら、“I’m”は“You’re”が生きる地であるからだ。“I’m”は“You’re”が生き存在する地であり、“I’m”は“I’m”である必要はない。ただ、“You’re”がある、それだけである。

しかし“You’re”があるところに第三者である我々は“I’m”を見るのである。“I’m”と“You’re”

という対称性は、この詩を外側から客観的に眺める傍観者によって見出されるのみで、“I’m”の主観に“I’m”はない。あえて言うのならば、“You’re”を語る声、それが“I’m”であるだろう。

“You’re”という詩の中で、“You’re”「あなたがいる」ということが何より、“I’m”「わたしがここにいる」ということを語っている。このことは言葉での説明が要らないくらい当然のことであったので、彼女はただ“You’re”を呼んだ。

そして何故、“You’re”が“I’m”と重なり合い、互いを語りえるかという点、“You’re”はわたしがあなたを呼ぶ声であり、あなたがわたしを呼ぶ声でもあるからだ。

6. 総合的考察

これまでの詩の分析から、“You’re”という詩に不毛の中の小さいのち、というものを見出すことが出来た。そして、わたしとあなたの重なり合いは母と子の鼓動の重なりであり、「共にある」という点で“You’re”と“I’m”は一つとみなすことが出来る。産む者と生まれる者が「一つ」として互いを感じているという意味で、この詩は胎児を詠い、自らが胎児であることを詠い、自らの内的な生命が胎児のようであることを詠っている。

もう一つ指摘したいことは、プラスの外界に対する傷つきやすさ、敏感さである。詩の小鱼、うなぎ、蕾は固い入れ物の中に入っており、入れ物の中でしか生きていけない。彼女の柔らかな内面は生きているのであるが、まだ外に出ることができないでいる。固い殻がないと生きていけない状態であるといえる。

本論では“You’re”も“I’m”も共に胎児として論じてきた面があるが、一連の考察を終えた今、“You’re”と“I’m”が同一ではないという点も明らかにしておきたい。

“I’m”は胎児である“You’re”を育てる場である、とするなら“I’m”は“You’re”を包むことになる。これは詩の分析から導いた“You’re”が“I’m”を隠しているという考察、つまり“You’re”が“I’m”を包んでいるという構図とは矛盾するように見える。しかし、“I’m”と“You’re”を二重の円で描かれる固定された線画のように捉えるのではなく、一人の人の内の二つの鼓動の重なりとして両者を見れば、一つの鼓動の重なりが“You’re”と“I’m”であることに気付く。ぴったりと一つに重なった鼓動を“You’re”のものとして聴くとき“I’m”の鼓動は聴こえず、またそれを“I’m”のものとして聴くとき“You’re”の鼓動は聴こえない。それでありながらやはり重なった一つの鼓動は、確かに二つであるといえる。

ここで心的な次元から現実の次元に話を戻すと、“Tulips”以降に見られる創作の変化の前触れは恐らくこの頃からあったものと考えられる。不毛の大地の中の小さな生命の種という意味で、豊かなその後の創作期に生まれたArielの作品群の中で、“You’re”は種として位置づけることが可能ではないかと考える。

この一見何気ない小品には、その時の彼女の内面が凝縮されており、種として例えるのであれば、「土にまくとき地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」²¹⁾ からし種といえるであろう。

不毛の大地は、「年老いた」と考えることも出来る。聖書ではアブラハムの妻で不妊の女、サラは神の力によって九十歳で子を身籠った。プラスの爆発的な創作期は彼女にとって、サラの妊娠のように遅すぎたものであり、九十歳にしてようやく子を授かったに等しい、人生で最後の創造のときであったと考えられる。

サラの産んだ子の名はイサク、「彼は笑う」という意味である。これは神が百歳のアブラハムと九十歳のサラの間に子どもが生まれると言うのを聞いたときにアブラハムが笑ったためである。そしてサラもまた自らに子が出来ることを信じられずに笑った。この笑いは、この詩の外側の不毛さのみを見て笑う者の笑いとも通じる。そして、この詩の外側に表された道化のような (clownlike) 笑いとも言えるであろう。

種と不毛の大地に関してもう一つ聖書からの記述をあげることが出来る。

「喜べ、子を産まない不妊の女よ、
喜びの声をあげて叫べ、
生みの苦しみを知らない女よ。
一人取り残された女が夫ある女よりも、
多くの子を産むから。」²²⁾

アブラハムとサラの間には子どもが生まれず、アブラハムは最初の子 (イシュマエル) をサラの奴隷であるハガルとの間にもうけた。そして、高齢になったアブラハムとサラとの間には神から約束された子、イサクが生まれた。奴隷の子は地上のエルサレムを指し、神から約束された子は天のエルサレムを指す。上の引用は天のエルサレム、自由な女、サラについての描写である。プラスの詩集のタイトルとなった *Ariel* はヘブライ語で、神の雌獅子、エルサレム等の意味があり、不妊の女が天のエルサレム、つまり *Ariel*に通じるといえる。

このように考えると不毛の大地を詠うこの詩 “You’re” はまさに不妊の女が後に豊かに葉を繁らせ実を生らせる前の、冬の時とみなすことが出来る。

以上のように、“You’re” という不毛の大地の種から *Ariel* の豊かな創作期は始まっていたと考えることが出来る。けれど種は地中で熱や水、酸素などが与えられなければ発芽することはない。“Nick and the Candlestick” では水が鍾乳洞を削り、永遠のような不毛の中に僅かずつ生命の徴を刻んでいく。このように、“You’re” 以降のプラスの人生に、彼女の種を芽吹かせる契機となる出来事や心的な体験が存在することが推察される。それについては、改めて他の作品の分析を通じて論じていきたいと考える。

Acknowledgements

I am grateful to Faber and Faber Ltd. to reproduce the copyright material, ‘You’re’ from *Collected Poems* by Sylvia Plath, ed. Ted Hughes. Copyright ©1960, 1965, 1971, 1981 by the Estate of Sylvia Plath. Editorial material copyright © 1981 by Ted Hughes. I also would like to

express my deepest gratitude to Sylvia Plath, whose work I find inspiring.

引用文献・注

1. Bassnett, Susan. *Sylvia Plath*. London: Macmillan Education LTD, 1987.p.109
2. フロイト『夢判断 上』高橋義孝訳、新潮社、2005 年。pp.117-118
3. Plath,Sylvia.*The Collected Poems*,Ed.Ted Hughes.NewYork:Harper Perennial, 1992.p.141
4. 山本昌輝「祈りと心理療法」p.284. 青木真理編著『風土臨床 沖縄との関わりから見えてきたもの 心理臨床の新しい地平を目指して』、コスモスライブラリー、2006 年。
5. スティーブenson 『詩人シルヴィア・プラスの生涯』風呂本惇子訳、晶文社、1994 年。p.267
6. Plath,Sylvia.*The Collected Poems*,Ed.Ted Hughes.NewYork:Harper Perennial,1992.p.14
7. *ibid.*,p.13
8. *ibid.*,p.141 ll.1-2
9. *ibid.*,ll.3-5
10. *ibid.*,ll.6-8
11. *ibid.*,l.9
12. *ibid.*,ll.10-12
13. スティーブenson , *op. cit.* , p. 235
14. Plath, *op. cit.* , p.141.ll.13-16
15. *ibid.*,ll.17-18
16. 河合隼雄、『ユング心理学入門』培風社、2005 年。p.121
17. *ibid.*,pp. 130-131
18. *ibid.*,p.131
19. *ibid.*
20. Plath, *op. cit.* , p.240 ll.4-5
21. マルコによる福音書 4.31-32 『新共同訳 聖書』、日本聖書協会東京、2006 年。
22. ガラテヤの信徒への手紙 4.27 *ibid.*

参考文献

- Arid, Eileen. *Sylvia Plath*:Edinburgh,Oliver&Boyd,1973.
- Enniess, Stephen . Kukil, Karen. *No Other Appetite, Sylvia Plath, Ted Hughes, and the Blood Jet of Poetry* . N.Y.:The Grolier Club,2005.
- Hughes,Ted.ed., *The Journals of Sylvia Plath*.N.Y:Anchor Books,1998.
- Jobes. G. *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols*. New York: The Scarecrow Press,Inc.,1962.
- Kendall, Tim.*Sylvia Plath:a critical study*. London:Faber and Faber, 2001.
- Kroll, Judith. *Chapters in a Mythology The Poetry of Sylvia Plath*.Stroud:Sutton Publishing, 2007.
- 柏原有紀子、「シルヴィア・プラスの詩における意味の拓け」、『ホリスティック教育研究』、日本ホリスティック教育協会、第 11 号、pp.24-33、2008 年。
- ルルカー、『聖書象徴事典』池田紘一訳、人文書院、1988 年。

(本学大学院博士後期課程)